

令和3年6月

語り部：藤本 辰昭

私の父は、戦争が終わる1年前の6月に30歳の若さで亡くなりました。父は、少年時代、スポーツマンで足の速い人でした。また、やんちゃな人だったので、兵隊に入れて鍛え直してもらったらいいと祖父が志願して、海軍に入りました。そして、母と結婚し、姉と私を授かりました。その後、昭和20年（1945年）5月に日本海軍より父の戦死の通知がきたのですが、写真1枚といっしょに東シナ海で殉職と書かれていただけで、遺骨もなく、どこでどのようになくなったのかもわからず、人が一人なくなることが、こんなにも軽く扱われることに母はととてもつらい思いをしたと言っていました。父が亡くなったとき、私はまだ母のお腹の中にいました。そして、私が小学3年生になったとき、興居島付近で、潜水艦が引き揚げられました。この潜水艦は、父が乗っていた潜水艦でした。

昭和19年（1944年）6月に伊予灘で潜水艦の訓練をしていましたが、何回目かの訓練で事故が起こり、沈んでしまいました。沈んだ潜水艦には、104人の海軍の乗組員が乗っていて、助かったのはたった2人だけでした。沈没した潜水艦はそのまま9年間海に沈んでいましたが、昭和28年（1953年）7月2日に興居島付近で完全に引き上げられました。そこから、当時の乗組員の白骨化した骨などが見つかりました。

潜水艦が引き上げられて、海に花を供えました。潜水艦が見えてくると「この中にお父さんがいるのよ」と母が言いました。そして、海から引き揚げられた遺骨と対面しました。骨は真っ黒になっていて、恐くも感じましたが、初めて見た父の姿に小さな声で、「とうちゃん、とうちゃん。」と何回も呼び掛け、涙が溢れました。遺骨は真っ白だと思っていた私は「なんで骨が黒いの？」と母に尋ねると「長い間苦勞したからだよ」と母は答えました。あとで知りましたが、実際は油でどろどろになっていたから黒くなっていたようです。

私の母はこの潜水艦の引き上げをきっかけに、父がこの潜水艦に乗っていて、沈没して亡くなったことを知りました。父はちょうど沈没の1週間前に帰宅していて、「南方に行く」と言ったまま消息が絶たれていました。それから約1年後に、遺骨が帰ってきましたが、写真が1枚入っただけで、まさか瀬戸内海で沈没しているとは思いませんでした。父が亡くなったとき、私はまだ母のお腹の中にいました。そして引き上げ当時、私は9歳でした。私は、父を写真でしか見たことがなく、肌の温もりを知りません。母は、父について語ることはあまりありませんでした。ただ、「素晴らしい父だった。」と簡単な言葉しか。しかし、母がまだ子どもたちには何もわからないからと、私や姉のために引き上げ当時の新聞記事を大切にとっておいてくれたおかげで、父のことや引き上げ当時の状況を大人になってからわかることができました。

母の死後、タンスの整理をしていたところ、「南洋行動日記」と書かれた一冊の日記が見つかりました。私にとって、写真以外の唯一の父の遺品です。この小さな日記には、昭和16年（1941年）の航海中の行動が書き綴られています。この日記から生前の父を、また

戦争の悲惨さを知り、平和の尊さを知りました。父の命日の6月13日には、私は父の日記を何度も読み返し、潜水艦引き上げ当時の写真に目を通します。何回見ても変わるものではないけれど、私なりに父のことを想像し、今の幸せを感じ、平和のありがたさを考えています。

今の日本は、平和そのものです。しかし、戦争中は、多くの人が貴重な青春と人生を捧げ、命をかけて戦いました。そして、多くの人が死にました。今の平和は、この人たちによって築き上げられてきたことを多くの方は忘れがちではないでしょうか。戦争がどれほど悲惨で、平和がどんなに尊いものであるのか。このお話しを通して、少しでもみなさんに平和の尊さを伝えることができれば幸いです。